

第1学年「体育」学習活動案

授業者 和氣 拓巳

2月21日（土） 高校体育館 9:00～9:40（話し合い：1階C室11:00～11:45）

1 単元名 あそびが生まれるとき「トイレットペーパーと身体と体育館」

2 単元について

本単元は、「体育」と表記しているが、いわゆる一般的な体育を想定しているものでない。子どもの躍動するエージェンシーを保証する、新しい〈体育〉としての挑戦である。また、「あそびが生まれるとき」と題したが、私の捉える「あそび」とは、目的や成果に先立つ余白の時間とも言える。それは、子ども、物、場、身体がもつれ合い、予期せぬ出来事が立ち上がる過程そのものである。他者の評価や指示が弱まり、感覚がゆらぎ、関係の中で諸要素が応答し続けるとき、主体と客体は固定されず絶えず生成する。あそびは学びの前段ではなく、世界をつくり続けていく実践そのものである。

副題を「トイレットペーパーと身体と体育館」とした。体育館という場に、子どもたちが現れ、そこに置かれているのはトイレットペーパーのみである。こうした状況では、どのようなもつれから、どのような出来事が生まれるのだろうか。ここであえてトイレットペーパーを用意する理由は、トイレットペーパーとは生活用品であり、あそびの道具としてあらかじめ意味付けられていないこと、そして体育館には本来置いていない物だからである。例えば体育館にボールを用意すれば、子どもたちの活動は自然とボールあそびへと規定されてしまうだろう。そうではなく、「トイレットペーパーと身体と体育館」という通常出合うことのない三つの要素が出合うとき、それぞれの関係の中からどのような出来事が立ち現れるのかを見ていきたい。トイレットペーパーを投げたり、転がしたり、身体に巻きつけたり、丸めたり、ちぎったり、そのまま重ねて高いタワーのようにすることもできるかもしれない。そこに現れる子どもたちの姿は実に多様であり、そうしたあそび（出来事）は、絶えず流動的に変化していくだろう。その中で子どもたちは、あそびをよりおもしろくしようとしながら、自らあそびのルールを変更しつつ、一つのことにこだわり続けることもある。物や他の活動にも影響を及ぼれ合いながら、生まれたあそびを壊してはつくりかえ、自らのやりたいことを次第に顕在化させていくこともあるだろう。その過程において、自然と生まれるあそびを媒介にして commons（共同性）が立ち上がり、少しずつアセンブリッジ（流動的なまとまり）が形成されていくことを期待している。しかし、子どもの活動を見無視して、子どもたちを教師が方向づけることはしない。教師の立ち位置や、身振り、言葉は、あそびの流れを微細に変えてしまうこともある。このような自覚をもち、あくまで子どもを出発点にして子どもの現れを受け取り、ともに出来事に巻き込まれながら子どもとともに場の関係を編み直していきたい。

3 学習計画（1時間目／全10時間）※あくまで予想

第1次 トイレットペーパーと出合う…3時間

第2次 活動が流動的なグループ活動になる…3時間

第3次 グループで活動を工夫し始める…4時間

4 本時の活動について

(1) 本時のねらい

- ・「トイレットペーパーと身体と体育館」という関係の中で、あそぶ

(2) 予想される本時の展開

主な活動と子どもの姿	留意点
1. トイレットペーパーと出合う。 体育館という場、トイレットペーパーというモノ、そして身体が出合う。関係のもつれによってあそび（出来事）が生まれる。 例：投げる、転がす、敷く、滑る、巻きつけるなど	○ 子どもの活動の方向性を教師が規定しないように、子どものエージェンシーに寄り添っていく。それは、傍観するという意味ではなく、何が起きたかをともに感じ、またともに悩み考えていくという意味で、共構成である。
2. 分かち合う どのような出来事が生まれたのか、サークルで聴き合う。	○ 子どもの様子を見ながら、分かち合うことをしないこともある。状況に応じて判断したい。
3. 片づける	

□授業後の話し合いで話題にしたいこと

どのようなあそびがどのような要因によって生まれていたか。あそびは子どもにとってどのような意味をもたらすか。皆様の感じたことについて聴き合いたい。

参考文献

ジェーン・ベネット（2024）『震える物質 物の政治的エコロジー』，水声社